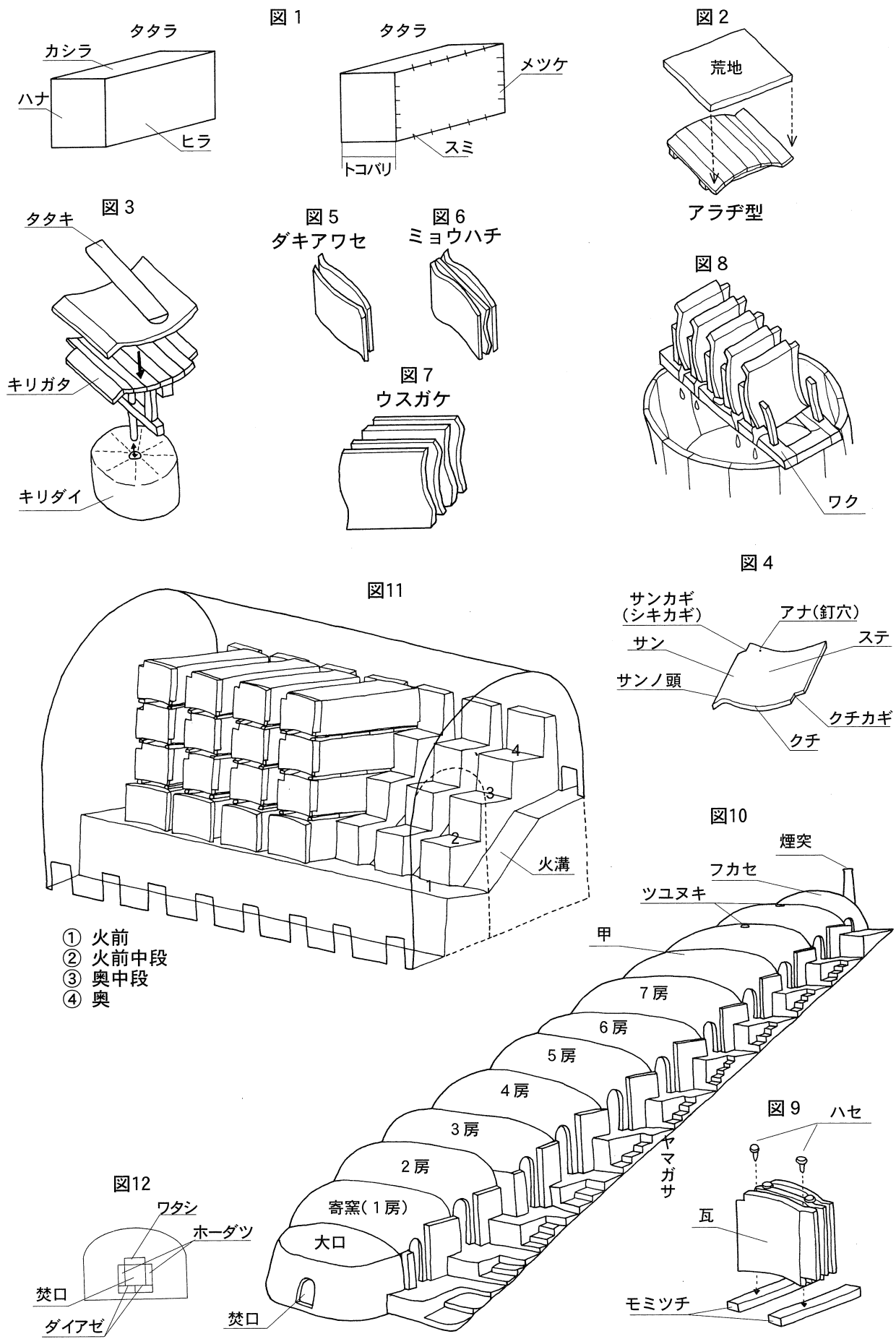




第一図 石州瓦図譜

(七) 経営、職工、行事

カーラヤ 瓦製造業

カンバ 瓦工場

ヤキワタシ・ヤキウケ 一枚いくらで焼いて経営者に渡す請負の一方

カチヨウ 工場を借りて経営する事

シラヂウケ シラヂ一枚いくらでシラヂの製造を請負う。

オヤカタ 経営者

カンキチ 瓦職工見習者

ナカデマ カンキチの上役

コヤドーシヨク 職工の最上役

トーシヨク 職工長

カマタキ 窯焚き

キリチン 一枚幾らで請負て瓦を切る人

シヨクニン コヤドーシヨク、カマタキ、ナカデマを総称して云う

モンイタシ 紋板、須山など裝飾瓦を専門に作る人

仕事初め 春になつて初の仕事日

(八) 瓦の種類

ヒラ

唐草 (カラクサ)

ソデ (袖) 大ソデ・小ソデ

ガンブリ

スミ

ノシ

セイガイ

ヒモマル

タケマル

雪止

太鼓 (タイコ)

切巴 (キリドモエ)

クツ巴

紋板 (モンイタ)

須山 (スヤマ)

鳥休 (トリヤスミ)

ドーグモノ (道具物)

(カラクサ、ソデ、ガンブリ、スミ、ヒモマル、タケマル、雪止)

ウワモノ (上物)

(タイコ、トモエ、紋板、須山鳥休)

仲間入り

四月入り・小屋入り

ボンカンジョー

セツキカンジョウ

カタメノサカズキ

職工が親方を招いて酒食を共にす

親方が職工を招いて酒食を出す旧の四月一日ごろ。

盆勘定。春から盆迄の労賃の支払い

盆から歳末迄の労賃の支払

瓦工場では職工と工場主との労働契約は三月く盆迄。盆

く冬迄と半年毎に行うのである。この契約が成立した場

合、工場主はカタメノサカズキと称して酒食を出す。そ

して前金をも渡すのである。前金は労働者側から全額を

申し入れる。その返済は給料から月々差引かれる。借金

の一種ではあるが利子はつかない。現在では形式的なも

のとなつてきた。

セツキ前に行う。少し酒食を経営者が出す。

冬の採工終了の祝。経営者がふるまう。

カマの調子の悪い時に神宮を招いて祭をする。

瓦の種類は細かに分けるとまだ多数あるが基本となる種類はこの程度である。
(補充) セツキウリ? 仲買。仲買人。
都野津で普通に作っている瓦の図譜を作製してみました。皆様方の何かのご参考になれば幸いに思います。

(本文を一部改編して掲載した。図面省略)

昭和二十七年七月 森本幸治

ツユズリ

ヒカリガクル

ナガダキ(小口の)
カマがワク

クミキル

ハダガオクレル

ハダガサメル

モミツケバナヲキル

クチドロヲヌル

トメ

カマナリ

ヒダテ

トガワラ

カマヒバシ

コワリ

ヤガクル

ダイソク

タキツブス

最前面の瓦が倒れ落ちる事。火前の四段ごろの瓦に多い水分の多い場合にモミツチが柔らかくなつて重みに耐えず瓦がずり落ちる事

下の番のカマを焚く時に上の番のカマの中の瓦が光つてくる事。

その小口を焚き出してから三〇四時間ごろ焚いているカマの中の瓦が崩れ落ちる事。一部分が強熱されすぎた場合に起こる。

？

下のカマの焚き具合によつて一部分が低温でカマの肌に暗色部の存する事

風が吹いて冷却される部分が暗色になる事

下番のカマを焚いている時に上のカマの火前の瓦の地積みとの部と二段のモミツチとの間隔が開く事

焚き口を塞ぐ事

焚き終わったカマが冷めるためにカマの内部で音がする事。ピンピン。ドスン

瓦を厚くした様なもの。地積みの中の瓦の二ワリを防ぐために火前の地積みの中に置く。

カマの焚口に用いる素焼のフタ

トガワラを外したり上げたりするに用いる(鉄柄)

焚木を小さく割る事

熱気が焚口より吹き出る事

大束?燃料用松材

甚だ焚きすぎた事

(六) 窯出し、選別

クチヲキル

カマハズシ

タガネ

クチヲハル

クチヨリ

カマダシ

カワラニワ

カザクイ

カマソージ

ハセヒロイ

センベツ

ニワリ

クチコゲ

一等品

二等品

三等品

四等品

等外・ヤマユキ

ヒイツキモノ

チヤンバチ

ジガアレル

ケシヨ・スミツケ

ケツソク(結束)

焚き終わってから瓦を取り出すためにクチを開ける事

タガネによつてカマの中の瓦を離す事

鉄製品

？

クチ迄出した瓦をクチで大略選別する事

選別場への負い出す事

瓦の選別場

瓦にヒビの入っている事。急冷の故にとも。土質の故にとも云う

とも云う

カマソージによつて出たものの中からハセのみ拾う

瓦を何級かの段階に選り分ける

歪んだ瓦

クチがかけている事。カマ外しの時に矢敗する

瓦の形真直で色良く音の良いもの

瓦の形直で色少し落ち音の良いもの

形直で色少し落ち音少し落ちたもの

形歪み色悪く音稍良

クチコゲで音冴えず

瓦が互に密着して離すことのできないもの。廃品

歪みの甚しい瓦

表面の粗雑なもの。

ハセ、モミツケが外れる時にできた傷跡へ削炭(鉄砂

瓦へ)ペンガラ(赤瓦へ)をつけて見よくする

平瓦五枚一組としてワラ縄で結ぶ事(補充)地積み

ツミドリ

クスリガケしたシラヂをそのまま、積み重ねる事。場所の狭い場合にする

ホシ

アラヂやキリタテが寒さにより中の水分が凍って表面にできた星形の氷

ウロコ

右記の称であつてウロコ形になったもの

(四) 窯

カマ

窯。現在は登り窯を普通とする。

ミギガマ

カマズミする場合に小口が右側にあるカマ

ヒダリガマ

右記の反対

キアゲ

燃料となる松割木をカマに負い上げる

ダイソク

燃料となる松割木

オーイレ

瓦素地をカマ運び入れる事

カマズミ

瓦素地をカマの中に積み上げる事

ハセ(図9)

瓦と瓦とが粘着しない様に間に挟ませる。一度素焼きしたもの。

モミツチ(図9)

瓦の下において瓦の密着を防ぐ。粘土のまま用う

ハセ・モミツチ共に瓦の粘土より砂の多い脆い粘土を用いて作り、瓦が焼けてから瓦と離れ易くする

窯場の図(図10)

内部略図(図11)

ドウロ ゴウリ

モーロ ドーロはモミツチが焼けて廃品となったものを云う。

オイバセ

カワラを積む時に用いる粘土。モミツチより柔い土を用いる

モミツチズナ

モミ土につける砂で細粒の砂を用いる。アゼ、瓦などとの粘着を少なくする

メズナ

ツバミバセ

モミツチ砂として用いる。極細粒砂。有福村産
最前面に積んだ瓦が前に倒れるのを防ぐために柔い土を挟む。その土

ウワダン

四段目五段目ごろを云い道具物(カラクサ、トモエ、オ二瓦など)をつむ。

ノヘナ

積んだ瓦が奥へ傾いている場合

キユーナ

つんだ瓦が垂直な場合

ゲタをハカセル

道具物を積む時、高さを他の瓦との粘着を防ぐ様に少し

クチヨカケル

高くするために道具物の下にモミツチをしいて高くする

ワタン・ホーダツ・ダイアゼ クチアゼ(図12)

(五) 窯焚き

ツユダキ

カマの五番ごろから末迄各小口毎に火を焚いて水分をぬかす

ヌクメ

大口で徐々に火を焚く事。四、五時間ゝ十時間

ホンダキ

大口を強く焚く事。十六時間ゝ廿十時間

ナカダキ

ホンダキにかかつてから四ゝ五時間程度のころ

コクベ

少しづつ焚く事

オークベ

ホンダキの終わりごろ殊に強く焚く事

アク

オキ(燠)の事

大口が焚き終ってから各窯の小口を下段より順次に焚く事

コグチヲタク

ハシレル

温度急上昇の場合瓦が破損する事

サエル

温度上昇してカマの中が黄白色になる事

アガル

焚きが終わる事

ハナトビ

焚くのが強すぎた場合とか積み方が垂直にすぎる場合、

キリタテ 切り終わったもの
キリタテ・キリ場 切る場所

型より内側に傾いて切る事

ウチギリ

ソトギリ

アナアケ

カワラガマの柄の先端につける瓦の穴あけ道具
ステ・サン・クチ・サンノアタマ・サンカギ（シキカギ）・
アナ・クチカギ（図4）

マキオロシ

カマに水をつけて切った跡をなでて切り跡の小穴をつぶ
す事。（クチの場合）

リヨウナデ？

カタナデ？

ナデヲカウ

切ったアラヂをカマでなでる事。肌目が細くなつて外観
がよくなり、釉薬がのり易くなる。

ユビナデ

角を指でなでて滑らかにする。

（三）乾燥・釉薬ガケ

スクマセル

切った瓦を一日位置く事

ホシニワ

ウラゾクロイ

ステガイヌル

カヤス（モドス）

ハンシラヂ

タナガケ

ダキアワセ（図5）

ミヨウハチ（図6）

ウスガケ（図7）

アツガケ

ウスガケの瓦の如き並べ方だが、各瓦を二枚づつにする。

以上のダキアワセ・ミヨウハチ・アツガケ・ウスガケは干す瓦の乾燥棚への
並べ方

シンガアオイ 乾燥中のシラヂの深部が未乾で湿った色をしている事

シブがウク 乾燥により斑点のできる事

キレ 亀裂

トマ ワラ製品でコモに似ている。棚の外側に張って強風や雨

タナオロシ のしぶきを防ぐ

アクタ シラヂをシラヂ小屋に積むために下ろす事

シラヂ シラヂを積むための敷物。ワラ屑

オシメゲ 乾燥した瓦素地

クスリ 積んだ圧力でシラヂのこわれる事

クスリガケ 釉薬をシラヂにかける事

ワク（図8） クスリガケを終わったものを置いて釉薬を小時滴らす道
具

クスリジャク

ハンギリ クスリガケするシャク

ブンジ 大桶

クスリガキズム 攪拌器具

トビガトブ 釉薬が沈澱する事

フリドリ 釉薬が乾いてからの小さい亀裂形。釉薬の濃い場合に多
い

ムコウドリ クスリガケしたシラヂを振って、しづくをたらしておく
事

デバシリ ワクにあるクスリガケしたシラヂを取る事

デヲキル リレー式にものを運ぶ時最初の物をとりあげる人
？

イレフネ

土を槽に入れる事。

ジョレン

土をフネに入れてそれを山鍬で小さく削り混ぜる事。現今、都野津では土練機を用いるから廃れた。

ボーズ

坊主。ジョレンした土を坊主形にして、フネより取り出す。その坊主形の土

ボーズをカヤス

ボーズを針金で三分位の厚さに切つて他へ移し、ふみつけて練る

タタラ

ボーズを針金で切つて巾尺二寸、高さ三尺位、長さ十二尺位の粘土の垣の如きものに築く。この土塀の如きものをタタラと云う。これを適当に切つてアラヂにとるのであるが現在都野津に於てはアラヂ機を用うるので、これを作るのはアゼを作る時だけである。(図1)

タタラが槽の方へ傾いている。

オカノ方へ傾イテイル。前記の反対側に傾いている場合を云う。

メツケ

タタラの高さを区切る印 (図1)

トコバリ

タタラの中 (図1)

スミ

タタラの長さを区切る印 (図1)

ヒラ

タタラを一定の寸法にしてその寸法より余った土で、両横の部分。(図1)

サゲブリ

タタラの垂直を見る器

セギ

タタラの定規を止める竹製品

ヂヨウギ・タテヂヨウギ

タタラに用う。

テナワ

土を切る針金

ス

タタラの土の隙間

ジョレン以下ここ迄は、現在都野津に於ては、特殊の場合以外行はれない。フネ
土を土練するために入れておく槽。地面を尺五寸位の深

ドレンキ

アラネリ

シアゲ・二番練り

アラヂキ

アラヂトリ

フリコ

テナワ

アラヂ型 (図2)

アラヂヲワル

アラヂをカヤ(エ)ス

アラヂをヨセル

シヨリバ

ヒトミ

ヒトミイタ

マクリ

タタキ

カワラガマ(カマ)

キリガタ (図3)

キリクズ

キリシロガナイ

さに掘つた四角なもの。底や囲いに板が張つてある。この中に土を入れ適当に加水して使用に良い柔さにする。

土練機。土を練る機械

第一回目の土練

第二回目の土練

アラヂ機。アラヂ大略瓦形となつた粘土

アラヂを作る事

シラヂの破片を粉にしてフルイでふるつたもの。アラヂ相互の粘着を防ぐためにアラヂの間にふる。

土を切る針金

昔はこのものでアラヂにしていたが、現在はアラヂ機から連続して出てくるアラヂを受けるものとなつた。

アラヂ機よりアラヂが二枚つつ出る。その一緒になつているのを離す事。

アラヂをひっくり返す事

一まとめにする事

瓦製造場 (カマ場を除く)

シヨリバの窓。上・下

ヒトミを被う板

アラヂがよせてあるものの廻りをまくもの。ワラ製品

アラヂを叩く木製品。桜の木が良い。これで叩いて土を固める。

アラヂを瓦型に切つて全て瓦の型にする道具

キリ落した粘土

アラヂがキリガタに不足する場合を云う

都野津町瓦工場語録

初めに

都野津の瓦工場で用いている言葉を集めてみました。これによつて学者に調べて頂くと都野津或いは石見の製瓦技術が日本のどの辺の系統であるか解かるかもしれません。

或いは不明に終わつて骨折り損になるかもしれませんが、都野津瓦の歴史を調べるためにはあらゆる術をつくしてみなければなりません。この意味で皆様方の御協力を御願ひ致します。

この冊子の中に誤りやぬけていることがありましたら、ぜひとも御教へ下さい。

昭和27年7月 森本 幸治

(一) 採土、運搬

ツチヤマ 土山。瓦用粘土を採掘する場所。転じて採土の意にも、用う。

ドロヤマ 泥山。右に同じ。

ウワヤマ 上山。瓦用粘土上層の不用な砂土。

マサ(マサツチ) 粘度小でポツリポツリした土

マサズナ マサ砂。マサ土の砂が、かつたもの。

ヒメマサ 姫マサ。マサ砂で砂粒小なるもの。

アラマサ 荒マサ。マサ砂で砂粒大なるもの。

ネバ 粘度大なる土

トラ ?

ダコ ?

ハサリ 粘土層間に挟在する不用物。砂層。褐鉄鉱層。

シキ

シヨウヂ

シニヤマ

イキヤマ

ズリ

土のハダ

ヤ

オトコシ。

オトコビヤク

コマ

ヒヤリ
坪ウケ

(二) 瓦の成形

ドロガネル

普通に採土され得る粘土層の最下底。不用な粘土、又は砂がでることが多い。

小路？前年採土した隣を採掘する場合には前年採土して跡を埋めた境界より、或隔りをおいて採土する。その隔りの土。大体一尺。

死山。採土後穴埋めした部分。転じて一度採土しておいた土全部をも云う。

生山。土山の未採土の部分。

崩れ落ちた土

土の小隙間

木、又は鉄の光った棒。直径三分五分。長さ尺五寸位。これを土に打ち込み、土のハダを大にして土を崩す。

男日役。右の名称は採土以外の労働にも普通に用いる。日やといである。

オイコに土を一荷(容積。チリトリ二杯。重量未乾燥の瓦(アラヂ)六く八枚分―一枚、一メ―)入れて土置場へ負うて運搬しコマと称するもの(小さい厚紙に工場印を押したもの)を一枚貰ふ。この枚数により賃を勘定する。この方法による運搬法をコマと云っている。

日給で運ぶ人夫。運搬に限らず極めて普通に用いる。六尺立方の土を一坪として採土運搬を請負うる。

採った粘土が雨露によつて碎かれ、又不用分が流されて使用に良い状態になる事